

年間第 29 主日 (ルカ 18:1-8)

司祭の唱える祈りに参加者みなが深く一致できるように



鯛ノ浦で、吐血して緊急搬送された母親に、もしものことがあった場合に備えて待機しておりましたが、いつの間にか待機日数ばかりが増え、日に日に元気になりまして、戻って来る直前には手すりをつたっての歩行訓練が始まるまでになりました。輸血しても輸血しても追いつかないほど出血し続け、胸が締め付けられたことを思えば、信じられない回復ぶりです。ひとまず安心しました。担当医の懸命の処置にも頭が下がります。

さて日本の教会は「新しいミサ式次第」発行から3年が経ちました。3年前の原稿をもとに、式次第の中の「叙唱前句」について少し触れたいと思います。具体的には「主は皆さんとともに」「またあなたとともに」「心をこめて」「神を仰ぎ」「賛美と感謝をささげましょう」「それはとうとい大切な務めです」この部分になります。

この叙唱前句の目的は、解説を引用すると「賛美と感謝の祈りを唱える人と、参加している信者が互いに心を合わせ、信者が司式者の唱える祈りに深くあずかるようにすることです」となっています。

その中で特に、「信者が司式者の唱える祈りに深くあずかるようにすること」この部分に中田神父は身が引き締まりました。信者が司式者の唱える祈りに深くあずかるためには、当然、司式者がそれ相応の唱え方、祈り方をしなければならない。私はそう理解しました。

信者が司式者の祈りに深くあずかれるのは、司式者の祈りが信者の心に響くときでしょう。信者にとって司式者の祈りが、まさに願って欲しい祈り、神様に届けて欲しい祈りに聞こえたとき、司式者の祈りに深くあずかれるわけです。それは同時に、司式者の祈りに深く一致できる瞬間でもあります。

これまで3年、新しいミサの奉献文を唱えてきました。唱えていくうちに、心に響く部分が出てきました。以前の奉献文には無かった新しい部分です。「いま、ここに集うわたしたちをあわれみ、」という部分です。

以前は、「なお、わたしたちをあわれみ」という漠然とした表現でしたが、「いま、ここに集うわたしたち」と実際に集まった会衆を強調しています。「いま、」「ここに」集うわたしたち。司式者の祈りに深くあずかれるように、司式者の祈りに深く一致できることができるようにと、実によく考えられていると思います。

ルカ福音書の22章、過越の食事の冒頭で、イエスが珍しく個人的な感情を表す場面があります。「苦しみを受ける前に、あなたがたと共にこの過越の食事をしたいと、わたしは切に願っていた。」(22・15) この祭壇で繰り広げられていることは、イエスが切に願っていたことなのです。それが司式者から参加している会衆に伝わるように、司式者と会衆の一致した祈りとなるように、常に心がける必要があります。

朗読された福音にも触れておきましょう。一人のやもめが、傲慢極まりない裁判官のもとにやって来て訴えます。「相手を裁いて、わたしを守ってください」(18・3)。この女性の言葉はボディブローのようにじわじわ効いてきます。ボクシングでボディブローは、効き始めると地獄の苦しみを味わうそうです(ちなみに顔を殴られ続けて倒れるのは天国の快感を味わうそうです)。諦めないやもめの訴えに耐えられなくなった不正な裁判官は、ついに本来の務めを果たします。

どんなに傲慢な人でも、不正な人でも、良い部分はあるわけです。やもめの訴えは不正な裁判官からさえも正しい振る舞いを引き出す粘り強い訴えでした。不正な裁判官から隠れていた良心のかけらを呼び覚ます、心に響く言葉を持っていたやもめ。それはイエスのことだったのかも知れません。

司祭も、ミサの中でイエスの働きをします。これまで数限りなくミサをささげましたが、そのうち何回が、「いまここに集うわたしたち」の祈りを御父に届けたのでしょうか。また祈りの結果、なるほどと、納得できるような形で御父から答えを引き出せるミサをおささげできたのでしょうか。十分でないことを認め、神にあわれみを乞うしかありません。

もしかしたら叙階式ミサのその日、このミサ一回だけは、個人的な感情を挟まず、祈りをささげられたかも知れません。そうなるともしこれから失点を取り戻そうとしたら、何十年も、私心なく、二心なくおささげしていかなければなりません。私は、命が尽きるまでに、皆さんの祈りを私心なく御父にささげる境地に達することができるのでしょうか。皆さまの助けがなければ一人では出来ないことです。

イエスはミサの中で一人ひとりの司祭を使って、昼も夜も叫び求める人の声を拾い上げ、父なる神に届けてくださるのです。それはどんな司祭であっても、「あれが司祭か」と思える司祭であってもです。力を引き出してくださるのはいつもイエスだからです。

皆さんが祈りの中で願い求めていることは、イエスが目の前の司祭を通して必ず父なる神に届けてくださいます。今回のミサ奉献文の変更で、私たちは「いま、ここに集うわたしたち」となりました。これからも、司祭と心を合わせ、ミサをささげていきましょう。司祭も今まで以上に皆さんと深く心を合わせて、ミサをおささげしていきたいと思います。

年間第 30 主日(ルカ 18:9-14)